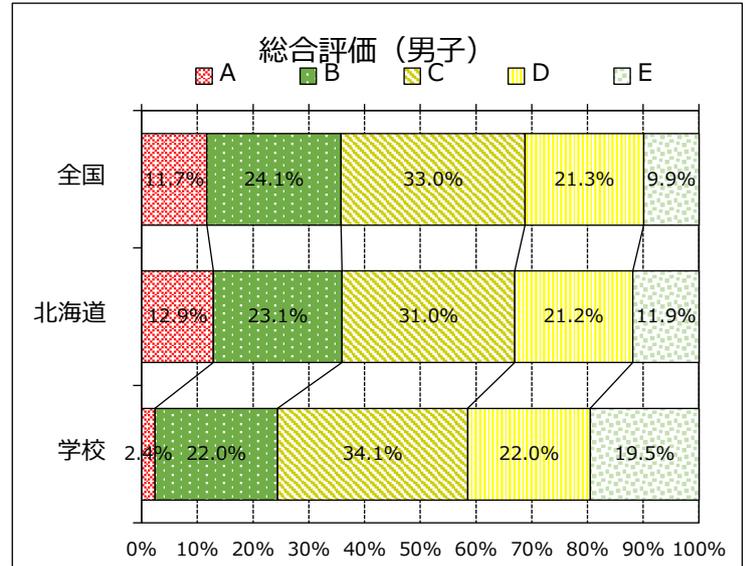
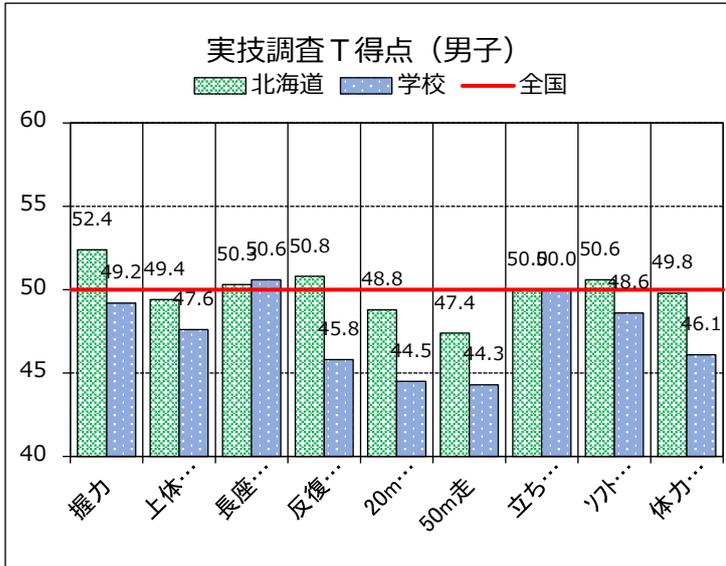


令和元年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査 結果分析

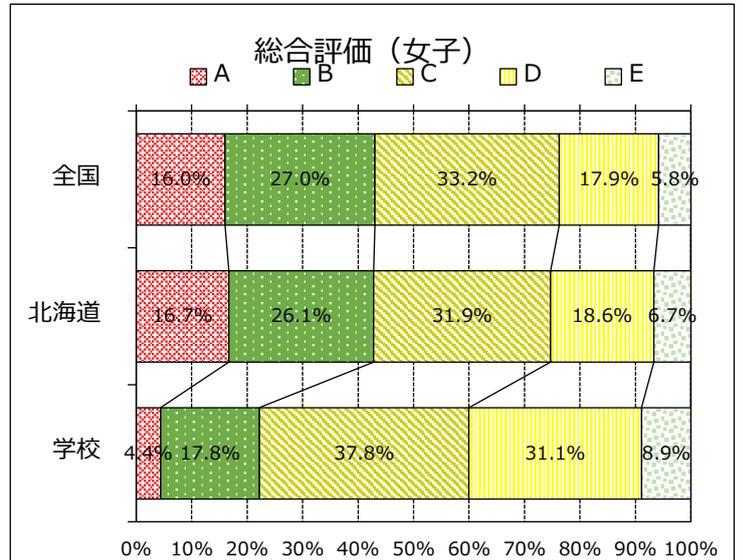
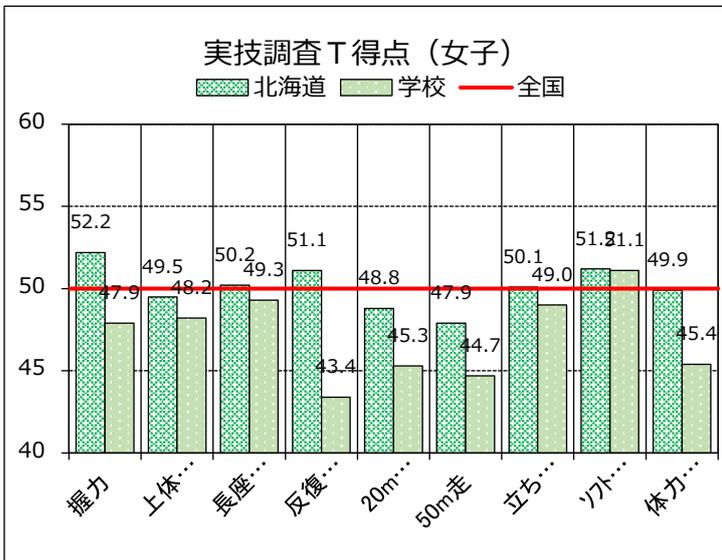
(第5学年)



○長座体前屈、立ち幅とび以外は、全国平均を下回る結果となった。

○特に『走』の種目が低く、20mシャトルランは5.5ポイント低く、50m走については、5.7ポイント低かった。反復横とびも4.2ポイント下回る結果となったことから、「持久力」「走力」に大きな課題があることがわかった。

○総合的には、A判定の上位層が極端に少なく（全国と比べると9.3%少ない）、E判定の下位層が極端に多い（9.6%多い）ことから、全体的な運動能力の低下がうかがえる結果だといえる。



○ソフトボール投げ以外は、全国平均を下回る結果となった。

○特に『持久力』の種目が低く、反復横とびは、6.6ポイント低く、20mシャトルランについては4.7ポイント低かった。50m走も5.3ポイント下回る結果となったことから、男子同様、「持久力」「走力」に大きな課題があることがわかった。

○総合的には、A判定の上位層が極端に少ないが（全国と比べると11.6%少ない）、下位層では、それほど大きな差はないことから、運動の機会が増えれば差は縮まると思われる。

<児童質問紙より>

- ①運動が好きな児童は、全国と比較しても高く、特に男子は12.9%多い。
- ②運動の喜びを感じる瞬間は、「上手にできた時」や「仲間と活動している時」と答えた児童が多かった。
- ③スポーツの意義や大切さを感じている児童も多く、全国と比べても男子で10.4%、女子でも3.3%高い結果となった。
- ④進学後もスポーツをしたいかという質問には、「はい」と答える児童が男女とも全国を上回った。
- ⑤1週間の運動量は、男女とも土日が多く、学校で体を動かす機会が少ないことが明らかとなった。
- ⑥平日のテレビやゲームに費やす時間は、全国の2倍以上とかなり多く、これが体力差につながっていると思われる。
- ⑦授業の目当てや振り返り、仲間との話し合い活動の実施率は、全国と比べて低く、ただ体を動かすだけでなく、目標をもって取り組むことが、より子ども達の成就感につながると考えられる。

<考察>

- 運動を好きな児童が多いことから、その機会を増やし、目標をもって活動できるような取組を考えることで結果につながっていくと思われる。また、子ども達が成就感ややる気を感じられるように、授業改善に努めていく必要がある。
- テレビやゲーム等、生活習慣の改善も体力向上には不可欠である。生活リズムシート等を利用して、家庭にも積極的に呼びかけていきたい。
- 「走力」や「持久力」の向上につながる「おにごっこ」や「けいどろ」等、積極的にグラウンドで遊ぶ環境づくり（全校遊び等の児童会活動、イベント係等の学級係活動）を工夫していくことで楽しみながら体力の向上を図っていきたい。

